

# 明治・大正・昭和前期の学童の衣生活とその背景（第6報）

伊地知美知子・松田歌子

## The Costumes of School Children and their Background in Meiji, Taisho, and the First Part Showa (Part 6)

Michiko Ijichi・Utako Matsuda

### I 緒言

明治、大正、昭和前期の学童の衣生活とその背景について、さきに、浦和市（第2報）、前橋市（第3報）、高知県（第4報）、並びに横浜市（第5報）の調査結果を報告した。

今回は既に発表した上記の地域とは地理的に隔たり、自然環境、社会環境とも著しく異なる広島県因島市をとりあげ、主として前橋市、浦和市と比較対照しながら、調査した結果を報告する。

### II 調査資料

- (1) 因島市内小学校の卒業写真
- (2) 因島市内小学校の沿革史、百年誌
- (3) 文献（広島県教育史、因島市史他）
- (4) 古老よりの聞きとり

### III 因島市の生活環境

#### (1) 自然環境

因島市は瀬戸内海の中心点に位置し、面積39.34平方キロメートル、周囲は40キロあまりで、人口約3万9千人（昭和57年調査）の島である。1953年（昭和28年）に隣接する生口島の一部を合併して市制が施行された。気

候は、年間を通して気温が比較的高く、雨量も少ない温和な海洋性である。地質は主として花崗岩で、南北に山が連なっている。西部、南部海岸は単調で変化に乏しいが、東部、北部海岸は起伏に富むリアス式海岸である。

#### (2) 社会環境

室町から戦国時代にかけて瀬戸内の海を席卷していた村上水軍の根拠地として栄え、江戸時代には海運業と共に、海面干拓などで新田も開発され活況を呈したが、明治に入り衰微した。明治30年頃から船渠工業が起り、44年には島の南部に大型造船所が建設され、造船工業の隆盛と共に発展した。

造船とその関連産業で島の経済を支えていることから、造船不況の現在では兼業農家が増加の傾向にあり、柑橘類を主とする樹園地が耕地の80%を占めている。

かつて因島では除虫菊の栽培も有名で、明治27年頃から第二次世界大戦前頃までが最盛期で、最高面積は24ヘクタールにも達していた。しかし合成ピレトリンの急増とアフリカ新興地の進出により、昭和40年頃から急速に衰退し、現在では観光客用に見られるのみとなった。

## IV 主な調査対象校とその周辺

### 1. 重井小学校 明治6年10月創立

重井町には尾道、三原、今治港との間に就航する汽船、フェリーボートがあり、因島海上交通の中心的役割を果たしている。

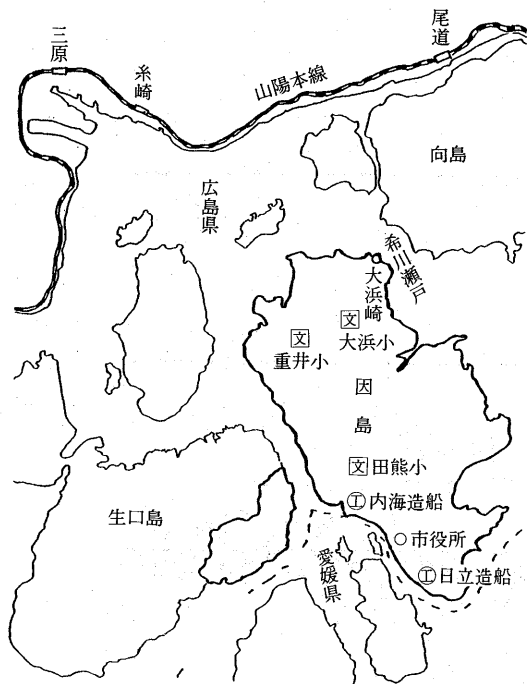


図1 因島市略図

### 2. 田熊小学校 明治6年創立

田熊町は八朔の発祥の地として有名である。大正元年には因島電気の発電所が設置された。

### 3. 大浜小学校 明治6年創立

大浜町は瀬戸内海の重要な航路である布刈瀬戸に面しており、明治43年に建てられた大浜崎灯台が有名である。

## V 調査結果

### 1. 明治、大正期 (和装時代)

#### (1) 就学状況

明治5年に学制が発布された。学制は国民教育の大理想をかかげた制度であった。しか

し当時の国民にはまだ教育の重要さが理解されず、今回調査の瀬戸内海の中央部に位置する因島においても、既発表の地域同様、就学率は低く、特に女子は明治の半ばまで著しいものであった。江戸時代から「夫は社会参加、妻は家事・育児」という性別分業思想が著しく、「夫支配・妻服従」の家父長制権威構造が女子教育の重要性を無視させていたようである。

広島市本川小学校に明治22年入学した安田リヨウ氏<sup>1)</sup>は、当時の様子を次のように語っている。「……私は如何に女がいじめられたかということについて話してみましよう。……登校の道の左右に竹馬に乗った男の子がいて「女だ！」と叫んでやってきて、『女のくせに生意気な、学校へなど行って』と言って、髪(まんじゅう髪)をひっぱって泣かされたものです。……その頃、15、6才位の大きな男の子らは学校にも行かずみんなぶらぶら遊んでいました。……当時広島では、女子に教育をつけるということはそれこそ恥であつたらしく……田舎などでは子供を学校にあげていてもむしろかくしていた程です。」

この言から、当時はいかに一般人の教育への関心が低いものであつたかが推察される。

明治26年7月22日付 文部省訓令第8号<sup>2)</sup>で「現在学令児童100人中修業者50人強にして、そのうち女子はわずかに15人強に過ぎず……教科目に裁縫を加うるを要す」と言わしめた程である。しかし重井小学校での就学状況<sup>3)</sup>には、訓令とやや異なる状態が見られる。図2に示す通り、明治20年頃まで女子の就学率は著しく低い、その後上昇を始め、28年頃には、男女の就学率は、殆ど等しい状況になっている。広島県内では明治29年頃より裁縫科の増設が盛んに行われた<sup>4)</sup>が、重井小学校では文部省訓令より早く21年7月に裁縫科を設置している<sup>5)</sup>。これが重井小学校における女子の就学率を高めた一要因と言えるのではないであろうか。

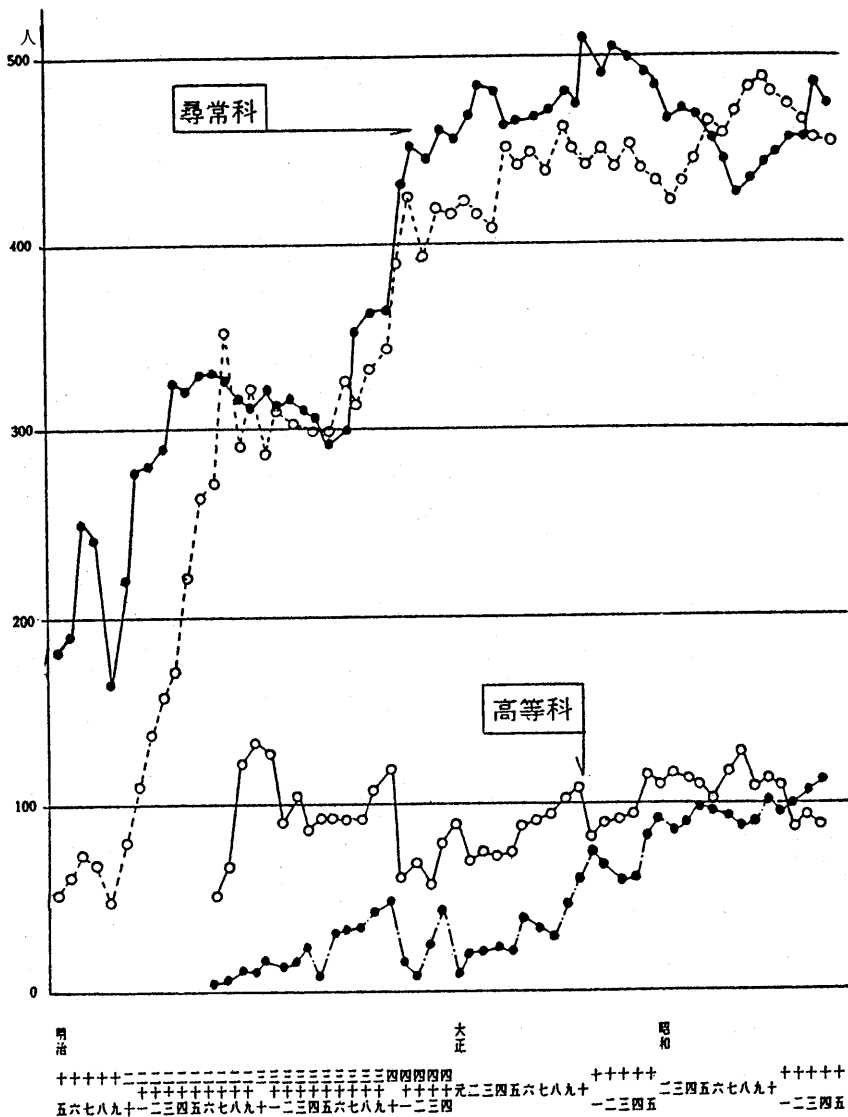


図2 就学状況(重井小学校)

また因島市には安永年間以来(約250年前)防貧策という制度があり<sup>6)</sup>、後桃園天皇所属不定地とあるが、いわゆる村有地を貧窮者に僅かの賃地料にて貸与している。その為、豊かとは言えないまでも、村民は比較的安定した生活を送っていたものと思われ、村の福祉対策も女子の就学を増加せしめた原因の一つと考えられる。

しかし、高等科では未だ女子の就学率は低いものであった。

島の南部の三庄町では、日清戦争後の大恐慌のさ中、明治30年12月に村民60名の協力により、小学校にオルガン1台が寄付されている<sup>7)</sup>。このように村民は次第に小学校教育に理解を示してきた。しかしながら高等科の女子の就学率が男子と同様になるには、先の図

2の如く、年月を要した。

(2) 学童の生活

因島の学童の生活は次のようであった。

村上伸一氏(大正13年重井小卒)<sup>8)</sup>は、「普段は木綿緋に兵児帯をしめ、学用品は風呂敷に包んで、藁草履をはいて通学した。金持の子はカバンを持っていた。藁草履は自分で編んだもので、1日ですり切れてしまった。1日に20足は編んだ。昼ごはんは家まで帰って食べた。麦が7~8割入ったごはん、いもをよく食べた。親たちは畑に行き、5・6年生は子守をしていた。」と語っている。

畑仕事が終わって、家族で土間にすわり藁草履を編んでいる姿が目につくようである。

さつまいもは朝も晩も主食としてよく食卓に登ったそうである。さつまいもは、因島に1608年頃に大三島の浅見吉十郎という者から栽培法が伝えられた。因島の地質の多くは砂質土であるため、稲作は全くだめであるが、いもの栽培によく適し、第二次大戦後まで主要農産物であった<sup>9)</sup>。

(3) 着物の柄と形

a 男子

写真や古老よりの聞きとりにより、明治期

の終りから大正の始めまで、縞や緋の着物に下駄か草履ばきという姿が一般的な通学の形で、これは既報告の地域と同様である。

図3は重井小学校男子着衣の柄の推移を示すものである。この図から明らかな通り、縞柄は明治から大正にかけて次第に衰退し、それに代わって緋が普及する。しかし、因島市で見られる緋は、明治30年頃から関東で流行し始めたいわゆる飛び緋とは全く趣を異にし、写真1(明治38年重井小学校卒業写真)の如く、縞の中に模様を織り込んだり、縞を崩した複雑な柄である。

前橋市では緋の普及と共に式日の紋付や無地は殆ど見られなくなったが、因島市では大正の終り近くまで、式日には紋付羽織の着用者がかなり見られた。このことは、因島市には村上水軍の子孫であるという誇りが島民の気風としてあり、そのうえ明治30年頃から船渠工業が起り、その後大型造船所が建設されて、島民の生活は比較的潤っていたものと考えられる。

その為緋への移行も浦和市、前橋市よりやや早かったといえる。

袖の形としての筒袖は、文部省より明治27

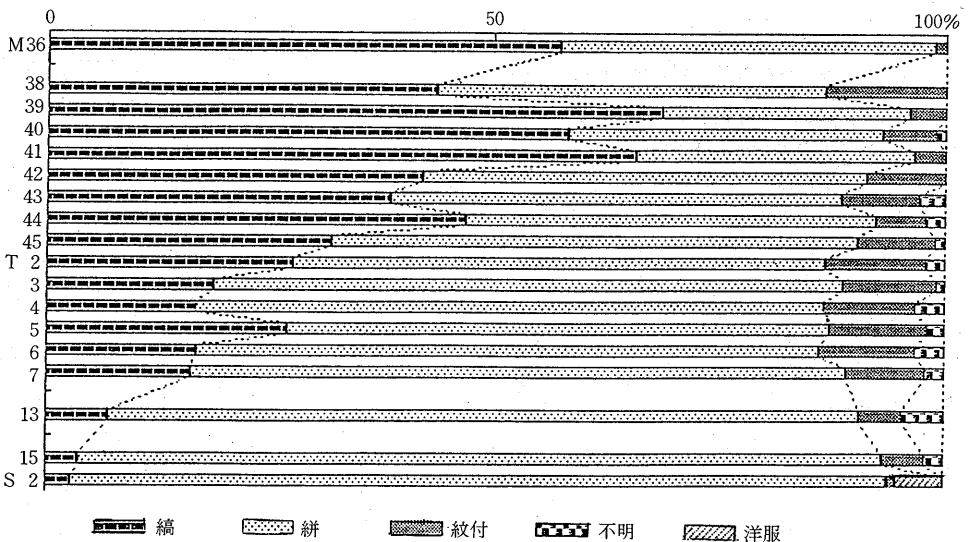


図3 着物の柄の推移(重井小学校男子)



写真1 明治38年重井小学校卒業生

年9月に出された体育衛生訓令<sup>10)</sup>の中において奨励されているが、重井町ではそれより早く、明治21年3月、教育談話会を開き、「児童の衣服への改良を促し、角袖を筒袖と

なす<sup>11)</sup>。」と記録されている。これは明治25年文部省発行の教科書<sup>12)</sup>や、浦和市<sup>13)</sup>、前橋市<sup>14)</sup>の明治30年の写真に見る角袖より著しく早く筒袖への改良を行っているもので、

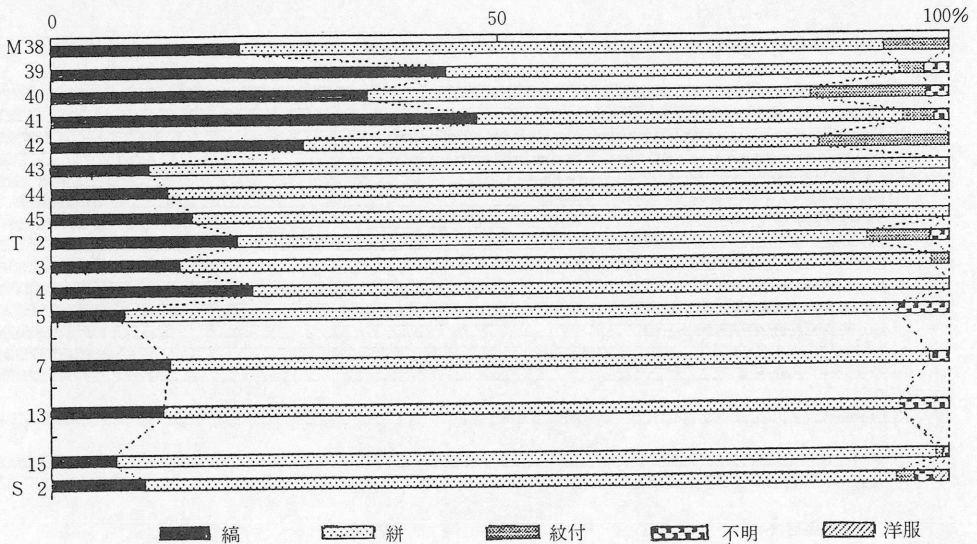


図4 着物の柄の推移(重井小学校女子)



重井町では体育に力を入れていた為<sup>15)</sup>、動作の防げにならないよう、早くから筒袖への改良に気付いたのであろう。

b 女子

女子着衣の柄の推移は図4の通りである。この図から、男子より早く明治38年、すでに緋の普及は著しい。

ここでは縞柄、緋柄共に前橋市、浦和市に比べて柄が大きく、格子柄や横縞もかなり見られ、関東とは趣を異にしている。

今回の調査で既報告の地域では見られなかった特徴的なことは、写真2に見る通り、子供たちの衿に黒いかけ衿がかけられていることである。

黒衿は、前橋市では明治24年と27年の高等科の卒業写真に1名ずつ見られたが、その他では全く見られなかった。浦和市では平常着の写真に数名見えるが、卒業写真に黒衿をこのように多数みることはできなかった。

黒衿は江戸時代の町娘の名残りと思われたが、因島市ではそれよりも実用的な理由が大きいのではないと思われる。図5は式日の

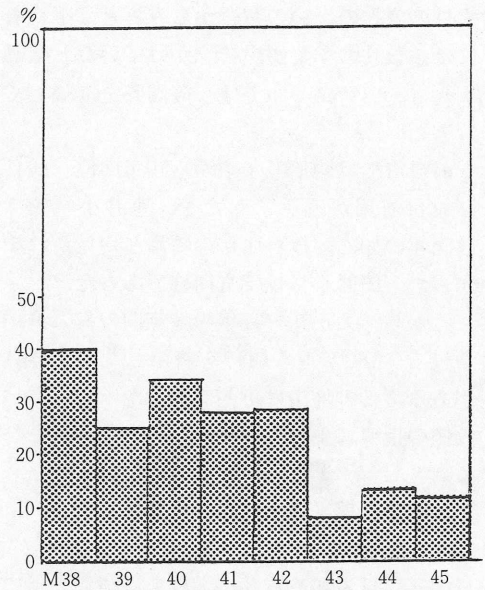


図5 黒衿の着装状況(重井小学校女子)

着衣に黒衿をかけている比率を示した。

因島市での黒衿は明治と共に消滅し、大正3年に1名見られたが、その後は全く見られない。実用的理由から黒衿を用いたとすれば、



写真2 明治40年重井小学校卒業生(女子)

式日の着衣の黒衿の割合からみると、平常着にはかなりの学童が黒衿をかけていたと推測される。黒衿については今後調査を継続して行きたい。

前橋市では明治35年頃から10年間位、式日に紋付着用が流行<sup>16)</sup>したが、重井小学校では図4の如く、極わずかの着用しか見られなかった。田熊小学校でも同様であった。

しかし、大正10~12年の3年間のみ大浜小学校で、100%近く紋付を着用した卒業写真がある。この理由は不明であるが、恐らく学校側の指導によるものではないかと推測される。

## 2 昭和前期（洋服への移行時代）

### a 男子

図6に見る如く重井小学校では昭和2年に始めて洋服着用者が現われた。田熊小学校ではそれより少し早く大正13年に初めて洋服姿を見ることができた。既発表の前橋市、浦和市においても大正13年頃より洋服姿が現われた。これは関東大震災による地方への帰省者によるものであろうと推測したが、ここでも同様の理由によるものと思われる。

重井小学校では、昭和6年頃まで洋装化はなかなか進展しなかった。しかし、田熊小学校では昭和3年頃から急上昇に転じ、昭和5

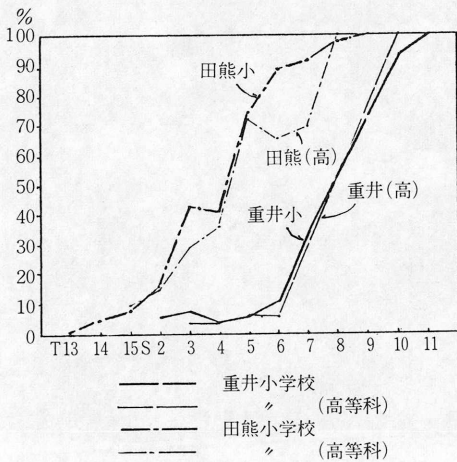


図6 洋服への移行過程 (男子)

年に70%を越え、昭和9年遂に100%となった。これは田熊町は、官公庁等が集中し市の中心となっている土生町に隣接していることや、大規模な造船所が近くに存在していた為、男子通勤者の洋服姿を見慣れており、抵抗なく洋服へ移行したと考えられる。

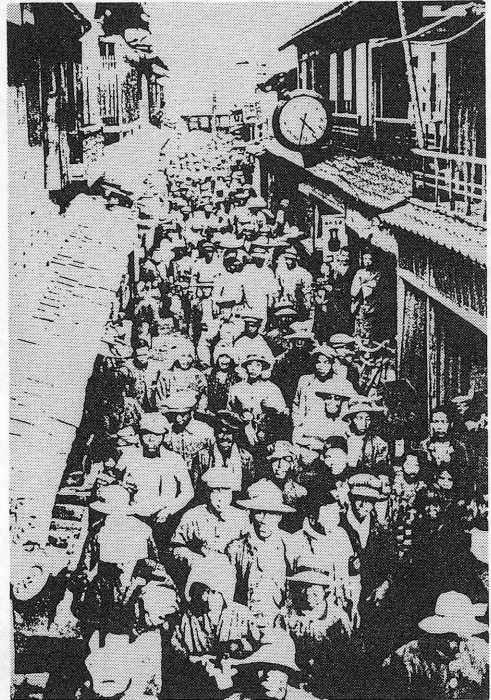


写真3 工場帰りの人々の雑踏振り (大阪鉄工所因島工場場門近くの荒神区通り 大正4年頃~ふるさとの思い出写真集より)

写真3は大正4年頃の大阪鉄工所因島工場の工場帰りの人々で賑う荒神区本通りである。男子通勤者の洋服姿の多いこと、また当時の造船業の好況振りがよく伺われる。

その後重井小学校においても急速な洋装化が進み、昭和10~11年に100%に達した。

洋装化への移行を前橋市と比較する(図7)と、造船の町田熊小学校と生糸の町前橋市は、共に昭和4~5年で50%の着用率となり、その後平和産業の町前橋市は緩やかに上昇したのに対し、田熊小学校の方は急上昇し



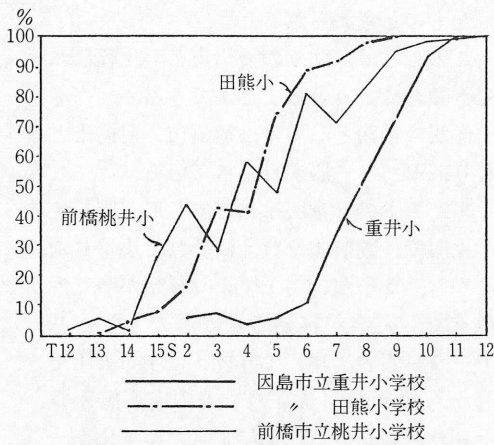


図7 洋服への移行過程(男子)

た。重井小学校は造船所からやや離れていた為か、昭和6年頃まで著しく遅れていたが、100%着用の時期は前橋市と殆ど同時である。

写真4は昭和10年重井小学校男子のものである。着物姿がポツポツと残っており、学生服の上に緋の羽織を着用した者が2名見られる。前橋市では着物の下に黒ズボンや着物の袴元に毛糸編の袴をのぞかせていた者が見ら

れたが、これも洋装化への過渡期の和洋折衷の姿であろう。

因島市では前橋市や浦和市に比べ、気候が温暖な為か、学生服の生地は小倉木綿であろうと思われるものも多く見られた。

b 女子

女子の洋服着用者は、田熊小学校では大正15年、重井小学校では男子と全く同じ昭和2年から現われ始めた。

女子の洋服への移行過程を図8に示す。

この図から、当初女子の洋装化は男子程進展せず、人々は周りの様子を覗っていた感がある。

皆に先駆けて初めて洋服を着用した大上氏(大正12年広島市己斐小学校入学)<sup>17)</sup>は次のように語っている。「私たちが小学校に入学いたしました時は、羽織袴でございまして、五つ紋の紋付を着てまいりました。それから、6年を卒業する時には(昭和4年3月)、女子68人のうち、5人ほどセーラー服を着て、おりました。……私は大正10年にハワイから帰りまして、12年に1年生に入ったのですが、

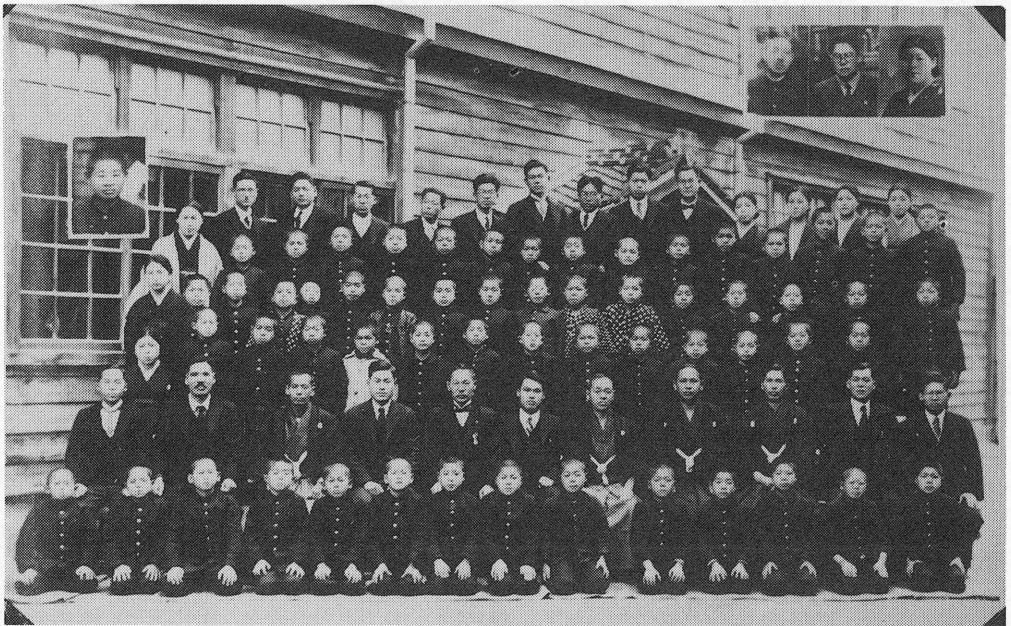


写真4 昭和10年重井小学校卒業生(男子)



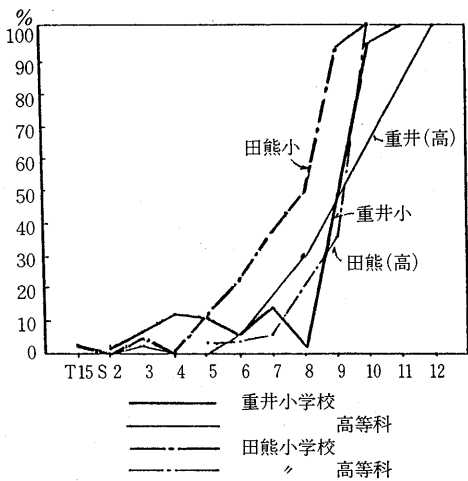


図8 洋服への移行過程(女子)

当時洋服を着ていたのは私ぐらいのものですから、皆さんに笑われて、砂や石をぶつけられました。今考えてみると尖端を切ったようで、肩身の広い思いをしております。」

人より先駆けて行くという事は、勇気を要することであり、周囲の反発や非難に会うようである。このような反発や非難は、実際は羨望の裏返しであったと推察される。

しかし、男子が殆ど100%となった昭和9、10年のわずか2年間位の間に、突然驚くべき早さで女子の洋装化は完成した。この急激な洋装化の波には誰も抵抗することができなかったようである。日本は既に支那事変へと突入し、造船景気を通して、島民は戦争への意識を強くし、機能性のある洋服へと一気に走

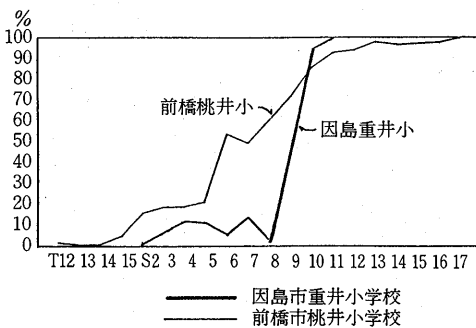


図9 洋服への移行過程(女子)

ったものと考えられる。

このことは、図9の前橋市との比較においても顕著に読みとることができる。

洋服の種類としては、横浜市、前橋市と異なり、セーラー服が目立っている。

当時男子の学童服は殆ど同じ形、同じ色の学生服で、既製服を買えばそれで事足りた。しかし、女子服は男子服より種類が多く形が様々で、入手が容易でなかった。しかし、セーラー服の出現により買えばすぐ入手でき、しかも他者と同じものを着る安心感から、セーラー服を着ることによって洋装化が一気に達成されたといえる。

大正末から昭和初期の洋装化のはしりに、前橋市や浦和市で著しい流行を見たものにエプロンがある。しかしここでは、昭和2年にそれらしき姿が1名見られたのみで、他は全く見られなかった。いかなる理由によるかは不明であるが、温暖な気候に恵まれている為着衣が汚れても洗濯すればすぐ乾き、洗濯を苦しなかった為であろうか。或いは和服と異なり、曲線裁ちを要するややモダンな形に尻込みをしている間に、因島市ではセーラー服による洋装化が一気に進んでしまった為、和服から洋服へのつなぎめの形を必要としなかったのではないかと考えられる。

### 3 髪型

#### a 男子

男子の頭髪は明治、大正、昭和前期まで、殆ど丸刈一辺倒である。

#### b 女子

既報告の前橋市、浦和市において、大正時代著しく流行していた稚児髷は、ここでは殆ど見る事ができなかった。

写真2に見る如く、前髪を切った「オカッパ」あり、「束髪」あり、「ひつつめ髪」あり様々である。その後明治42年から昭和13年迄、前髪を切った者は全くなかった。この理由はいまだ不明であるが、「女子は髪を切るべきでない」という風潮がその後何等かの理由に

よって起こったものであろう。明治時代の因島市の学童の髪型は自由であったようで、これは関東と大きく異なるところである。

明治43年3月、重井小学校で突然50%近い稚児髷が見られたが、その他は大正2年頃まで1学級23~24人中1~2名を見るのみで消滅した。それに代わり、後方高い位置でクルクルと束ねた型に変化している。

高知市においても明治35~6年までで稚児髷は消滅している。このことから、温かい土地では自然女子も活発な動きをする為、稚児髷は邪魔で不自由なものであったのであろう。

昭和10年に突然50%以上の者が顎の長さに断髪し、翌11年には前髪を横に流して100%の者が断髪した。服装もこの年100%洋服へ移行している。前橋市での断髪は昭和初期頃より始まり、洋装化と同じくゆっくり進んでいる。このことから洋装化と断髪には高い相関関係があるといえよう。

## VI まとめ

広島県因島市の学童の衣生活について、主に前橋市、浦和市と比較しながら調査した。

・明治時代の学童服としての和服は、始め縞柄が主であったが、次第に緋に移行した。

・因島市では小学校の体育に力を注ぎ、その為、明治21年3月、小学校の和服の角袖を筒袖にすることを取り決めて行った。これは、文部省の筒袖奨励(明治27年9月)より著しく早いものである。

・因島市の小学校で洋服姿が初めて現われたのは、関東大震災の年から昭和の初めである。しかし、大型造船所の存在する地域に近い小学校の男子はその後急速に洋服着用者が増加した。造船所の建設稼働は島全体の景気を上昇させ、造船景気は島民の意識を変えたようである。

・女子は初めて洋装が現われて後暫くは進展を見なかったが、昭和8~10年の2年間に

あたかも津波の押し寄せる勢いで洋装化が進んだ。これはセーラー服の普及によって行われたといっても過言ではない。

・因島市では明治期の小学生女子の式日の和服のかけ衿に黒衿が多く見られた。これは既報告の地域では殆ど見られないものであった。これは流行やおしゃれというより実用からと思われる。

・女子の髪型は、大正期浦和市では稚児髷が流行の髪型として多く見られたが、因島市では明治43年以後は殆ど消滅している。

明治期因島市の女子の髪型は種類が多く、おさげ髪は見られないが、前髪を切っている者、オカッパの者、束髪、ひつつめ等と様々である。前髪を切る流行は明治末迄ですたれ大正期には全く見られず、昭和に入り洋服の着用と共に再び「オカッパ」が復活した。

以上の通りで今回調査の因島市は、既発表の地域と共通点を持ち乍らも、気候、風土、経済に根差した差異と変遷が見られた。

本研究の調査にあたり、貴重な資料を御提供下さった各小学校の諸先生方、並びに御協力頂いた多くの方々に謹んで感謝の意を表します。また資料収集の為に御尽力賜りました因島市在住の萩原隆氏に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 1), 4), 7) 広島県教育委員会事務局調査課、広島県教育80年史、1954
- 2), 3), 5), 6), 9), 11), 15) 井上一次、白滝教育百年のあゆみ、重井町文化財協会、1980
- 7) 中島忠由・岡本馨、ふるさとの想い出写真集：因島、国書刊行会、1982
- 10) 教育史編纂会 関屋龍吉、明治以後教育制度発達史 第三巻、教育資料調査会、1964
- 12), 13) 高島愛、松田歌子、明治・大正・昭和前期の学童の衣生活とその背景(第2報) 文教大学教育学部紀要17、1983
- 14), 16) 松田歌子・伊地知美知子、明治、大正、昭和前期の学童の衣生活とその背景(第3報)

文教大学教育学部紀要18, 1984

### 参考文献

- 1 毛利義夫他, 因島市誌, 因島市史編集委員会, 1967
- 2 山本朗, 広島県大百科事典, 中国新聞社, 1982

3 近藤清一, 日本の統計, 清光社, 1983

4 相賀徹夫, 万有百科大事典, 小学館, 1976

5 大浜小学校, 大浜町くらしのガイド, 1983

6 因島市役所, 因島略史, 1984

### 聞き取り調査協力者

- 8) 村上伸一氏 明治44年生 因島市垂井町